

## 第 46 回

# 日本の書展

### 審査所感

#### 【漢字作品】石飛博光(いしとび はっこう)

日展特別会員 毎日書道会理事 全国書美術振興会常務理事 「日本の書展」現代書壇代表作家

私は、平素は筆を持つと、創作の作品作りよりも古典の臨書に熱中することが多いと思います。課題を一つにしぼらずに、例えば隷書を何日か臨書したら、次は顔真卿の行書を習うとか。その後はゴツゴツした直線の楷書を大きく拡大して書くというふうには、傾向の違う調子の法帖を習うようにしています。「網羅式臨書」というか、一つにこだわらず幅広く臨書をするようにつとめております。比較しながら多彩な美の姿や技法を学ぶことが出来ます。

この度の審査において皆さんの力作を拝見して感じたことは、臨書の課題が、中国明時代や清時代の真蹟からの臨書が多く、唐代以前の拓本による臨書がやや少ないように思いました。真蹟本は筆路がはっきりしていて、筆使いを勉強するのに適しており、拓本による臨書は、石刻の風趣を味わいながら楽しむことが出来て創作意欲を盛り上げてくれるので、ぜひ積極的に挑戦してほしいものです。

字形を丁寧に書き写すことにとらわれすぎて、運筆のリズムや筆勢や生気が乏しい作品が目につきました。剥製のようにはきれいに形だけを整えるのではなく、生き生きとした生命感を盛り込むことが臨書の表現の最も大切な仕事といえます。命を吹き込むのです。真っ赤な血を体内に…生を甦らせるのです。

来年もぜひ大勢の皆さんの挑戦を期待しております。

#### 【かな作品】師田久子(しだ ひさこ)

日展会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表作家

日本の書展の「公募臨書」部門も回を重ね、今年で7回目となる。仮名作品の応募数は前回より少し減少し、218点であった。今回は高木厚人先生と審査に臨んだ。

○関戸本古今集、香紙切等、比較的字粒が大きく、縦の流れの良い古筆を半切に拡大臨書として書かれた作品が多かったが、仮名の古筆を拡大し、作品にするには充分臨書した上で臨み、紙面に対する墨量、余白等を考慮しなければ、作品として弱く、机上作品と比べると劣る。

○反面、原寸臨書の机上作品は、寸松庵色紙、関戸本古今集、針切、石山切伊勢集、元永本古今集等の多くの古筆に取り組み、原本の料紙にも配慮し、レベルは高く、良く練習を積んだ作品が出品されていた。

臨書は、古典学習の段階では、欠く事の出来ない学習法であり、古筆から筆法やリズム、造形美、表現力など学ぶべきものは多く、自分の大なる勉強の場となる為、今後ますます期待が持てる内容であった。

#### 【篆刻作品】和中簡堂(わなか かんどう)

日展会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会評議員 「日本の書展」現代書壇代表作家

数少ない篆刻の摹刻<sup>もくく</sup>作品の出品者の中で、しっかりと古典を学んでいる作品が選出された。入選した作品は何れにおいても正確な摹刻で、好感もてる本格的なものばかりであった。ただ残念なことに、毛筆での落款のない印影のみの作品があったが、今後は必ず落款を書き添えるよう応募要項に追記したい。

近年は篆刻を学ぶ過程において摹刻を省略してしまう人が多いが、初心者のみならずベテランという人達にも摹刻は欠かせないものであると声を大にしておきたい。古今の名印は格調の高さや技術の確かさにおいても日常身近な存在として机上に不可欠のもので、幅広く大いに学んで欲しいと希求するものである。

個人で出品している人の中で落款の悪い作品、また隷記として格式を得ないものは選外という判断を下した。摹刻であっても古典を素直に学ぶという姿勢を尊びたい。摹刻を利用した自己表現の場ではない筈で、謙虚に学んでいるという篆刻作品が好ましい。篆刻に親しみたいという人達にも参考になる筈である。

臨書・摹刻作品といっても著作権に抵触するような作家の作品は避けたいものである。歴史という長い時間によって評価されてきた名印、名人達の遺印にこそ、私達が創作の源泉とするヒントが潜んでいるのである。大いに摹刻作品を寄せていただきたい。